

## 第4章 調査資料の整理・研究および公開・活用

### 第1節 調査資料の整理

#### 1. 調査資料の整理

2004年度の調査資料の整理は鹿田遺跡第13次・14次調査、津島岡大遺跡第26・28次調査の整理作業を中心に行い、また報告書作成作業に関しては『津島岡大遺跡15』（岡山大学構内遺跡発掘調査報告第20冊）・『津島岡大遺跡16』（岡山大学構内遺跡発掘調査報告第21冊）の二冊を刊行した。

『津島岡大遺跡15』は事務局本部棟新営に伴う第26次調査の成果報告書である。2000年度に実施した発掘調査であり、縄文時代中期～近世における土地利用形態の推移を明らかにすることができた。また古墳時代後期から中世にかけての「柵列」・溝状遺構に着目した考察を掲載した。

『津島岡大遺跡16』は環境理工学部校舎新営に伴う、第17次（1996年度調査）・22次（1998～1999年度調査）の二期にわたる発掘調査の報告書である。津島岡大遺跡のなかでも、特に縄文時代において最も遺構密度の高い地点の調査報告である。第17次調査地点の大半を占めるようにひろがる微高地での集落の実態とその北側の斜面部での状況を明らかにした。また縄文後期を中心とする遺物は、土器・石器ともに豊富であり、遺物の面からは、土器の型式学的検討、石器の特徴、縄文時代の石製収穫具に関する考察を、また遺構の面からは、条里の溝に関する考察を掲載した。

自然科学分析では、報告書作成にも関わるものとして、放射性炭素年代測定、樹種同定を行った。それぞれの分析結果については次項で報告している。 (岩崎)

#### 2. 調査資料の分析

##### (1) 放射性炭素年代測定

本年度は表8に挙げたように、14件の試料の放射性炭素年代測定を行っている。1～3は津島岡大遺跡第17次調査土坑9及び竪穴住居址1 炉1の試料であり、詳細な結果は報告書に掲載している。4～10は、2003年度に国立歴史民俗博物館に資料提供をおこなった試料7点である。その内訳は、土器附着炭化物4点（津島岡大遺跡第3・5・15次調査）と堅果類3点（津島岡大遺跡第3・15次調査）である。11～14は前述の4～7の試料について古環境研究所で分析を行ったものである。

表8 放射線炭素年代測定資料一覧表

	出土地点	遺構	対象資料	分析法	分析機関	備考
1	津島岡大第17次調査	土坑9	炭化物	AMS	(株)古環境研究所 (Beta社)	『津島岡大遺跡16』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第5冊に報告
2		土坑9	炭化物	AMS		
3		住居址1 炉1	土壌	AMS		
4	津島岡大第3次調査	13層	土器附着炭化物	AMS	国立歴史民俗博物館	平成13～15年度科研費基盤研究A「縄文時代・弥生時代の高精度年代体系の構築」 (研究代表者：今村峯雄)
5	津島岡大第5次調査	SP1	土器附着炭化物	AMS		
6	津島岡大第15次調査	貯蔵穴 SP13	土器附着炭化物	AMS		
7		谷部	土器附着炭化物	AMS		
8	津島岡大第3次調査	貯蔵穴 SP1	アラカシ	AMS		
9	津島岡大第15次調査	貯蔵穴 SP13	ドングリ	AMS		
10		貯蔵穴 SP19	ドングリ	AMS		
11	津島岡大第3次調査	13層	土器附着炭化物	AMS	(株)古環境研究所 (Beta社)	
12	津島岡大第5次調査	SP1	土器附着炭化物	AMS		
13	津島岡大第15次調査	貯蔵穴 SP13	土器附着炭化物	AMS		
14	津島岡大第15次調査	谷部	土器附着炭化物	AMS		

## (2) 樹種同定

本年度の整理作業に伴い、津島岡大第22・26次調査および鹿田遺跡第7次調査の木製品・流木について、森林総合研究所、能城修一氏に樹種同定を依頼し、有益な教示を得た。主な内容は表9の通りであり、詳細な結果については、正式報告書を参照されたい。

表9 樹種同定一覧

調査地点	分析機関	点数	主な出土遺構	報告
津島岡大遺跡第22次調査	森林総合研究所 能城修一	55	古代溝	『津島岡大遺跡16』
津島岡大遺跡第26次調査	森林総合研究所 能城修一	28	近世溝	『津島岡大遺跡15』
鹿田遺跡第7次調査	森林総合研究所 能城修一	27	中世・古墳井戸	『鹿田遺跡5』(編集)
鹿田遺跡第13次調査	(株)吉田生物研究所	2	中世井戸	
鹿田遺跡第14次調査	(株)吉田生物研究所	3	中世井戸	

## 3. 調査資料の保存処理

## (1) 木製品の PEG 保存処理作業

2002年11月より行ってきた第6期保存処理作業を継続して実施した。対象資料は津島岡大遺跡第19次・22次調査および鹿田遺跡第7次調査の出土品である。昨年度2月に濃度95%に達した後、蓋を開けて100%に上昇させている途中であった。今年度当初からも引き続き処理を継続していたが、8月4日に引き上げを行い、この日をもって第6回処理を終了した。

処理槽より引き上げた木器については、洗浄、乾燥、ラベル付けを行った後、収納した。なお、引き上げ後の一連の作業を岡山大学の博物館実習に取り入れ、岡山大学文学部の実習生の協力を得た。

表10 第6期保存処理工程

処理回数	年月日	作業内容
第6期	2002/11/12	濃度40%開始
	2003/4/18	濃度50%へ
	2003/5/29	濃度60%へ
	2003/8/25	濃度70%へ
	2003/9/30	濃度80%へ
	2003/11/10	濃度90%へ
	2004/2/4	濃度95%へ、蓋空け
	2004/8/4	引き上げ

表11 これまでの保存処理工程

期	期間	処理内容	処理期間
第1期	1992年2月～1993年11月	鹿田第1次(附属病院外来診療棟)・第2次(NMR-CT室)	1年9ヶ月
第2期	1994年6月～1996年8月	鹿田第3次(医学部短期大学部校舎本体)・第4次(医学部短期大学部校舎周辺配管)・第5次(附属病院管理棟)、津島岡大第3次(男子学生寮)・第5次(大学院自然科学研究科棟)・第6次(生物応用工学科棟)	2年2ヶ月
第3期	1996年12月～1999年6月	鹿田第3次(医学部短期大学部校舎本体)、津島岡大第3次(男子学生寮)・第6次(生物応用工学科棟)	2年7ヶ月
第4期	1999年7月～2000年12月	鹿田遺跡第3・4次、津島岡大遺跡第3次	1年5ヶ月
第5期	2001年1月～2002年3月	鹿田遺跡第3・4次、津島岡大遺跡第3次、第9次(生体機能応用工学科)・第10次(保健管理センター)・第12次(附属図書館)・第13次(福利厚生施設北棟)	1年2ヶ月
第6期	2002年11月～2004年8月	鹿田第7次(医学部基礎医学棟)、津島岡大第19次(コラボレーションセンター)・第22次(環境理工学部棟Ⅱ期)	1年10ヶ月

## (2) 外部委託による木製品の保存処理

本センターでは構内遺跡出土木製品について、多くはセンター内での保存処理を実施しているが、製品の素材や状態に依り、外部委託による保存処理を実施している。

本年度は下記の3件の遺物について、外部委託による木製品の保存処理を実施した。対象資料は下表の通りである。なお資料4の漆椀については、あわせて漆膜分析も行った。

表12 外部委託による保存処理遺物一覧

番号	遺物	調査次	出土遺構	時期	処理法	処理機関
1	漆椀	鹿田第9次	土坑墓	中世	アクリル樹脂法	(財)元興寺文化財研究所保存科学センター
2	木筒	鹿田第14次	井戸	中世	高級アルコール含浸	(株)吉田生物研究所
3	櫛	鹿田第14次	井戸	中世	高級アルコール含浸	(株)吉田生物研究所
4	漆椀	鹿田第14次	ため池遺構	近世	高級アルコール含浸	(株)吉田生物研究所
5	曲物	鹿田第13次	井戸	中世	高級アルコール含浸	(株)吉田生物研究所
6	曲物	鹿田第13次	井戸	中世	高級アルコール含浸	(株)吉田生物研究所

## 第2節 調査成果の公開・活用

2004年度は、津島キャンパスにおいてキャンパス発掘成果展を開催した。また大学生の博物館実習や中学生の職場体験受け入れのほか、総合学習時間を利用した小学生の見学に対する説明など、学校教育現場との連携も積極的に行った。

### 1. 公開・展示

#### (1) 第8回キャンパス発掘成果展

**概要：**津島キャンパスでは2000年度以降、毎年秋に定期的に展示会を開催しており、今年度は8回目にあたる。第8回のテーマは『土・技・心』との副題を設定し、土器の観察・製作技法の紹介をメインとした展示と、「分銅形土製品」を粘土で製作する体験コーナー等を設けた。開催期間は10月26日～31日までの6日間である。

会場は例年通り、埋蔵文化財調査研究センター収蔵庫2階展示室を使用した。見学者数は延べ253名であった。  
**内容：**『土・技・心』というテーマのもと、主となる展示では土器の時代による形・技法等の移り変わりを、縄文時代～中世にいたる煮沸具の変遷、弥生時代の高杯の変遷を通じて、観察したり、実際に触れることで体感してもらうことを目指した。特別展示としては弥生時代の「顔」の表現を、岡山大学考古学研究室収蔵の人形土製品を中心に、構内で出土した分銅形土製品・人面線刻土器の展示によって示した。

恒例となっている体験コーナーでは、展示品と関連して「分銅形土製品」を作るコーナー、縄文土器の文様つけコーナー（貝殻・縄・ヘラ等）、ロクロ切り離しコーナーを設定した。様々な文様の付け方や、成形技法を実際に行ってみることで、展示品を観察する際にもまた異なる視点を持つという相乗効果もあった。

見学者253名、アンケート回収は88枚であり、回収率は34%であった。来場回数を見ると、55%にあたる48名が初めての来場者であり、2回、3回以上というリピーターの割合は45%を占めている。リピーターの割合は年々着実に増加の傾向にある。また日別の来場者数では、開催初日にメディアで紹介されたことが功を奏し、水曜・木曜といったこれまでは来場者数の伸びない平日の見学者増につながったものと考えられる。

最も印象に残ったものとしては、分銅形土製品作成を挙げた方が25名と最も多く、縄文土器の文様付け（8名）、土器に直接触れたこと（8名）が続いた。その他に「体験」、「土器の変化」、「土層の剥ぎ取り」、「土壙墓」といった項目が挙がっており、今回の展示の目的に沿う結果が得られ



図39 津島キャンパス展示会風景

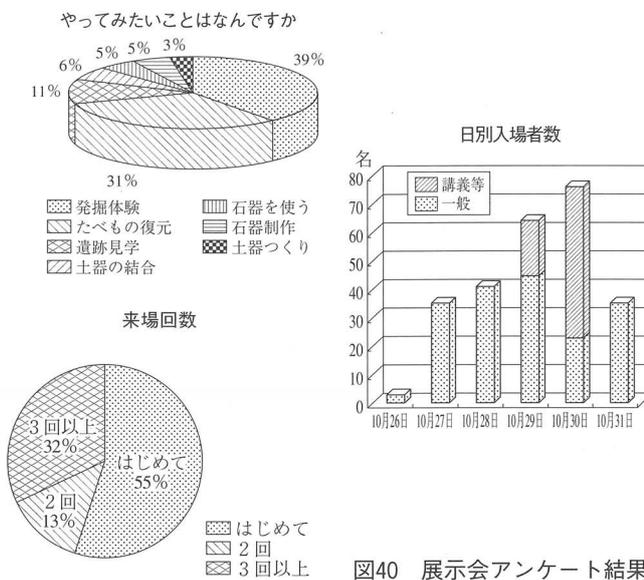


図40 展示会アンケート結果

た。また、直接出土遺物に触れることや、各種の体験への関心の高さを実感する結果であった。このことは、「やってみたいことはなんですか」との問いに対する回答のうち、発掘体験（39%）・石器を使う（5%）・石器作成（5%）・土器づくり（3%）というように体験に関係するもので半分を占めていることから窺える。  
**課題：**津島キャンパスでの展示会開催も2000年度から継続して5回目となり、毎年確実にリピーターを獲得し、好評を得ている。またアンケートの結果をみても強調したい部分に対する反応がよく、意図を伝えるという点は一定の成果があったと思われる。その一方、今回は目の不自由な方の見学もあり、見学施設としての安全性や利便性について考える良い機会ともなった。いわゆるバリアフリー対策として階段の傾斜や通路の通りやすさ等に配慮することも今後の検討課題である。

**成果：**今回は初めて目の不自由な方からの見学希望があり、盲導犬同伴で見学された。本センター展示室ではほとんどすべての展示品に直に触れることができ、何よりもその点が、目の不自由な方にも体感していただけたことで、展示する側もよい刺激を受けられた。

このような「実物に触れる展示」は、見学者に対して、予想以上に強い印象を与え、歴史を体感することに繋がる。しかし、通常の博物館等では様々な制約もあり、本センターのような小規模展示施設であるからこそ、実現できる部分も多い。このことが、本センターの展示会の大きな特色のひとつとなっている。

今後も展示方法・内容について意欲的な検討を加えて実践していくとともに、業務全体の中でのバランスにも配慮した取り組みとなるよう、公開・啓発活動の主幹として展示会を継続していきたい。

## 2. 資料・施設等の利活用

### (1) 教育機関への支援（授業などの受け入れ）

#### ① 博物館実習：（8/3～8/10）

岡山大学文学部が実施している学芸員資格取得のための授業（博物館実習）の受け入れを行った。期間は8月3日から10日の中の6日間である。全体を3グループに分け、それぞれ2日間を受講日程とした。昨年までは、受講期間中に発掘調査を実施していたことから、発掘調査参加も組み入れた日程としていたが、本年度は調査がなく、本センター施設内で、埋蔵文化財が出土してから展示されるまでの一連の作業工程を組み込んだ体験を実施することとした。

一日目にセンター展示室を利用して、構内遺跡の概要説明、センターの業務内容説明を行った後、出土遺物の注記作業を実施した。二日目は木製品の保存処理工程の一部を体験するというので、処理済みの木器引き上げ、ラベル付け、収納作業のほか、処理前の木器の計測等の作業を実施した。

#### ② 中学生の職場体験：竜操中学（11/16～18）、高松中学（11/19）

岡山市内の公立中学校2校より、職場体験の生徒各3名、計6名の受け入れを実施した。昨年度も受け入れを実施した岡山市立竜操中学校と岡山市立高松中学校の2校である。期間は竜操中学校が11月16日～18日の三日間、高松中学校が11月19日1日であった。

職場体験の内容は、遺物の注記・接合作業体験、種子の顕微鏡写真撮影、蔵書整理、清掃のほか、図版・写真のカバーかけ



図41 職場体験〈高松中学校〉



図42 職場体験〈竜操中学校〉

といった報告書作成に関わる諸作業である。

今年度は発掘調査のない時期の、博物館実習・職場体験の受け入れとなった。そのためいずれの取り組みでも、発掘調査後の埋蔵文化財の取り扱いが中心となる作業となった。木製品の取り扱いでは、特に本構内遺跡に特徴的な作業を経験するという意味で貴重な体験ともなったといえる。

③ 小学生総合学習：津島小6年生

小学校の総合学習の時間を利用して、身近な遺跡を調べるために津島小6年生が当センターを訪れた。常設展示室の展示説明を中心に、職員が説明を行い、児童からの質問に答えた。

## (2) 調査・研究への支援

① 資料見学・提供

- ・短甲（鹿田1次調査）：1件
- ・猿形木製品（鹿田7次調査）：1件
- ・縄文早期土器（福呂遺跡第1次調査）：1件
- ・中世土器（鹿田遺跡1・2・5・6次調査）：1件（胎土分析用）
- ・弥生時代中期土器（鹿田遺跡第1次調査）：1件
- ・石斧（津島岡大遺跡）：1件

② 図書の外部貸し出し：18件（岡山大学文学部学生他）

## (3) 資料の貸し出し

① 出版物の資料提供

- ・鹿田遺跡現地説明会資料（2003年10月18日実施）「月刊文化財発掘出土情報」2004年7月号掲載
- ・津島岡大遺跡第3・21次調査石庖丁状石器写真2点「古代を考える 吉備」吉川弘文館

② 他機関の展示・公開支援

- ・岡山県立博物館 『津々浦々をめぐる考古学』鹿田遺跡出土資料（7/12～11/25）及び図録掲載写真提供

## 第3節 2004年度調査研究員の個別研究活動

### 1. 科学研究費採択状況

岩崎志保：平成16年度科学研究費（若手研究B）「東周時代墓葬の比較考古学的研究」：研究代表者

光本 順：平成16年度科学研究費（若手研究B）「弥生時代から古墳時代における刀剣副葬に関する集成的研究」：研究代表者

### 2. 論文・資料報告

山本悦世：山本悦世・杉山一雄（共著）「岡山県域」『中津式の成立と展開』集成資料集 中四国縄文土器研究会  
「集落からみた山地域と沿岸域」日本考古学協会2004年度広島大会研究発表資料集 日本考古学協会  
2004年度広島大会実行委員会

- 「備前における9・10世紀の様相」第4回山陰中世土器検討会資料集『平安時代前期の土器様相』山陰中世土器検討会
- 「縄文時代後期の集落構造とその推移」『紀要2003』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 岩崎志保：『津島岡大遺跡16』（編集）
- 「糸里の溝について」『津島岡大遺跡16』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 「鹿田遺跡第14次調査出土木簡について」『紀要2003』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 「岡山・鹿田遺跡」『木簡研究』第26号
- 野崎貴博：「津島岡大遺跡第17・22次調査出土縄文土器の型式学的検討」『津島岡大遺跡16』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 光本 順：『日本古代の身体表現に関する考古学的研究』（岡山大学大学院文化科学研究科提出博士学位論文）
- 『近現代考古学の射程』六一書房（共著、執筆箇所「身体近代と考古学」）
- 『津島岡大遺跡15』（編集）
- 「古墳時代後期から中世における遺構群の変遷」『津島岡大遺跡15』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 「クイア考古学の展開」『ジェンダーの多様性・普遍性・可変性の分析および独自のジェンダー教育プログラムの立案を含む学際的研究』「ジェンダーの多様性・普遍性・可変性の分析および独自のジェンダー教育プログラムの立案を含む学際的研究」グループ
- 高田貴太：「垂飾付耳飾からみた朝鮮半島の対倭交渉」『古墳出土金工製品の日韓比較研究』（財）大阪府文化財センター

### 3. 研究発表等

- 山本悦世：津島やよい講座『弥生時代のくらしを考える』（岡山県教育委員会主催）コーディネーター（10月2日）
- 岡山大学文学部公開講座 講師「縄文から弥生へー津島岡大遺跡に刻まれた縄文人の選択ー」（10月23日）
- 「集落からみた山地域と沿岸域」日本考古学協会2004年広島大会（11月6・7日）
- 「備前における9・10世紀の様相」山陰中世土器検討会（1月22・23日）
- 光本 順：New direction in the archaeology of human body in Japan and its application to the social body in the Kofun Period, The Society for East Asian Archaeology, Chungnam National University, KOREA（6月17日）
- 高田貴太：「朝鮮半島大加耶地域の対倭交渉経路」考古学研究会岡山例会発表（7月）
- 「垂飾付耳飾からみた朝鮮半島の対倭交渉」近つ飛鳥博物館シンポジウム（3月6日）

### 4. 資料収集・実態調査

- 山本悦世：中世土器・猿形木製品に関する資料調査（大分県教育庁文化課）
- 岩崎志保：東周～漢代青銅器・墓葬に関する資料調査（出光美術館・国立国際美術館ほか）
- 野崎貴博：天狗山古墳出土挂甲の調査（東京国立博物館）
- 光本 順：刀剣、絵画資料、人物埴輪に関する資料調査（滋賀県、福岡県、群馬県）
- 弥生遺跡の実態調査（長崎県）
- 高田貴太：古墳時代金工品の資料調査（奈良県、大阪府、岐阜県）

## 第5章 2004年度における調査・研究のまとめ

**調査** 2004年度に実施した発掘調査は鹿田遺跡第16次調査1件である。鹿田キャンパスの北東部の立体駐車場新営に伴う調査であり、エレベーターピット部分のごく小規模な範囲であったが、これに伴う試掘調査・立会調査の成果も併せ、鹿田地区の北部の土地利用状況等に関して貴重な知見を得ることができた。津島地区においては、昨年度のような比較的規模の大きい立会調査はなかったものの、保健管理センター東側での立会調査（調査6）に示されるように、小規模なものであっても既調査部分の状況との比較検討により、有意義な成果を得ることができ、またこれまでの成果を補足するデータの蓄積もできた。また今年度は三朝地区においても試掘調査を実施した。同地区での調査の実施は1997年来である。今回の調査地点ではいずれも遺構・遺物包含層は確認されなかったが、同地区における土層堆積状況の確認及び旧地形の復元に際して新たな知見を得た。

**研究** 今年度は『津島岡大遺跡15』と『津島岡大遺跡16』の二冊の発掘調査報告書を刊行した。前者は事務局本部棟の新営に伴う発掘調査（第26次調査地点）、後者は環境理工学部棟の新営工事に伴う発掘調査（第17・22次調査地点）の成果である。まず、『津島岡大遺跡15』では縄文時代中期から近代に至る各時期の遺構・遺物が報告され、中でも縄文時代中期の遺構・遺物は津島岡大遺跡の中でも最初期の資料として注目される。隣接する第27次調査地点の成果とも併せ、当該時期の土地利用の実態をつかむ成果を得ることができた。また考察では、古代～中世における柵列遺構・溝状遺構の解明に向けた検討がなされた。『津島岡大遺跡16』では、縄文時代における津島岡大遺跡の中心的な活動域の状況、弥生時代以降の水田畦畔・用水路等の耕作域の状況、さらに古代以降近代までの条里に関わる溝の状況等を報告した。特に縄文時代後期の遺構・遺物の内容は質・量ともに既調査地点のうちで際だって密度の高いものであり、堅穴住居・土坑・溝から構成される集落のあり方や周辺の土地利用状態についての貴重な成果を得ることができた。考察では、遺物の分析として縄文時代後期土器の型式学的検討、石器の出土状況と打製石器の機能に関する考察、遺構の点からは、津島地区の北側を東西に走る条里の溝についての分析・検討がなされた。

そのほかにこれまでに構内遺跡に関して実施してきた自然科学分析について、これまでの成果をまとめて本紀要に掲載した。具体的には年代測定・花粉分析・植物珪酸体分析・樹種同定・種子同定の結果である。その中でも、津島岡大遺跡の放射性炭素年代測定の成果をとりあげ、掲載している。同じく本紀要では鹿田遺跡の研究として、第5次調査井戸6の井戸枠材についての分析をとりあげた。当該井戸は既に正式報告済みのものであるが、2005年度の展示会の際に保存処理を施した部材を確認したところ、いくつかの点で新たな知見が得られた。このように報告書作成中だけでなく、保存処理・展示公開等の取り組みの中で得られた新たな情報や知見について様々な視点から検討していくよう、努力していきたい。

**展示・公開** 第8回岡山大学キャンパス発掘成果展の開催のほか、博物館実習・職場体験の受け入れといった教育現場との連携を継続して行った。展示会では着実にリピーターが増加している。特に体験型展示や実際の遺物に触れられる展示方法が、好評であることは毎回実感として受けとめられるが、一方で開催場所のわかりにくさ等、広報活動や、よりわかりやすい展示方法の模索等、改善すべき点も多く、今後も改善を加えながら、様々な形での展示・公開活動に取り組んでいきたい。

2004年度は国立大学法人化して最初の年にあたり、本センターも法人理事がセンター長を兼務し、副センター長職を設けて新たな体制での運営がスタートした。上記の活動のほか、特に安全衛生の観点からの施設・設備の点検・整備にも力を入れた。設備面の充実に努力するとともに、専任職員の意識の向上、調査・研究面での内的な質の向上にも尽力していきたい。

(岩崎)